

『源氏物語』の明石の君と紫の君

— 表現の対応と対照性が示す短編性と長編性 —

新井 隆

はじめに

光源氏周辺の女性の中で、藤壺を除けば最愛の女性と思われる紫の上と、娘を産み光源氏の栄華の礎になっていく明石の君が、物語の展開の根幹に関わっていることは確かであろう。紫の上が明石の君に嫉妬し、やがて心を許していく過程など、二人の人間関係の変化についても注目すべき問題がある。さらに明石の君の娘の明石の姫君が紫の上に引き取られて養育されていくという繋がりも、二人の関係を考えていくうえで極めて重要な出来事であろう。語られる分量も多く二人が比較されることは自然なことであり、論じられることも少なくない。早い例としては、島津「一九三六」があり、

「斯くありたき」作者自身が紫上であるに對して、「斯くある」作者に最も近い女性を、源氏物語の中で私は明石上に見出すやうに思ふ。

と作者の創作の視点から論じている。その後も石田「一九七二」、斎藤「一九七九」、河内山「一九七九」、小島「一九八一」、また後で触れる他の先行研究など、物語の展開に沿いながら両者の関係をとおりあげた研究や両者を比較をした研究は多く、『源氏物語』の研究にとって大きなテーマとなっている。

このような二人が最初に言及される、あるいは登場する箇所が若紫巻において連続していることは見逃すことができないだろう。しかも、明石の君については、若紫巻において噂話の中で言及された後、物語世界への登場は明石巻まで待たねばならない。⁽¹⁾ 若紫巻冒頭の明石の君の噂話は実際の登場からかなり離れており、他の箇所には置かれても物語は成立するとも想像される。だからこそ明石の一族の噂話が若紫巻、しかも紫の君のいる僧房を見る場面と紫の君を垣間見る場面に挟みこまれていることは何かしらの意味を持ち、両者の連続性の中で注意すべき問題を孕んでいると思われるのである。

明石の一族の噂話の表現を詳しく見ると、若紫巻の紫の君と対応

する記述、あるいは対照的と考えられる表現があり、物語の構成上、両者の結びつきが浅くはないと考えられる。もちろん、明石の一族の噂話が論じられてこなかったわけではない。むしろ、本格的に登場する巻にかなり先行して噂話として登場することから、古注釈以来、玉上「一九七二」、池田「一九八〇」、鈴木「一九八二」のように構想の問題の面からも少なからず論じられてきた。また、噂話を中心に扱った研究として、若紫巻の噂話の影響や、若紫巻の噂話と須磨巻以降の明石の君像との相違を論じた秋澤「二〇〇七」、北山という空間と「海竜王の后になるべきいつきむすめなり」という表現から明石の君の人物造詣に吉祥天女と妙見菩薩とを見る竹内「二〇〇七」などがある。また、甲斐「一九九二」による日本語学の側面からの検討も挙げられる。さらに、後の巻との表現の照応については、特に構想の面からの研究において既に丁寧におさえられている。明石の君の噂話が当初から大きな構想のもとに書かれたものなのか、当初は大きな構想などなく挟み込まれたのかは分からないところであるが、現存する『源氏物語』においては長編の枠組みを支えるものの一つと位置付けられよう。

長編的な視野の研究が豊富な一方で、若紫巻あるいは紫の君を垣間見る場面という短編的な視野でこの噂話を考察するところのような意味を持ちうるかという点ではまだ考察の余地が多そうである。明石の君についての噂話と若紫巻の他の箇所との関連に部分的に触れた研究も見られるが、表現等の検討を行っている研究は少数にとど

まっている。その中で、三浦「一九九五」はこの問題を積極的に扱っている。明石の君の噂話が若紫巻の他の箇所とどのように接続されるのかということについて、明石の君の噂話を「娘を大事に育てている家をめぐる挿話である」と位置づけ、直後に語られる紫の君の「尼君以外に頼る者のない状態」との「対照の妙」を提えていた。ただし、この一点のみからの説明では、長々とした挿話の中で語られる複数の要素がなぜ必要であったのかという疑問は残るだろう。また、後で論じていくが、明石の君の噂話と若紫巻における紫の君の記述には対照的という言葉にはとどまらないものがありそうである。具体的には、基礎的な表現のレベルでの重なりや対応と考えられる記述が多く見られるのである。これらの点はまだ十分に明らかにされないように位置づけられるかという面についてはやはり考察の余地が大きいと考えるのである。本研究では、明石の一族の噂話と若紫巻の他の箇所の表現を検討することによって、若紫巻に明石の一族の噂話が置かれている意味とその表現の仕組みを検討していく。噂話として登場する明石の君と突然走り出て来る紫の君という対比、兵部卿宮の姫君と前播磨守の娘という対比など、構成や内容面での対比も可能ではあるが、本研究ではそれらの基礎となるような、表現のレベルでの分析をしていく。

一 若紫巻冒頭の明石の一族の噂話

明石の一族は、光源氏と明石の君との間に明石の姫君が誕生して以降、明石の姫君の入内などに伴って徐々に世間からの評判が高まっていくが、当初は地方の人々として軽く見られていた。それは既に若紫巻において見られるところである。明石の一族の話は、明石の入道の話から娘の話に移り、悪くはない容姿や氣立てなどが語られる。しかし、娘への入道の教えの話では人々の笑いの対象となっている。

「さて、そのむすめは」と問ひたまふ。「けしうはあらず、かたち心ばせなど侍るなり。代々の国の司など用意ことにしてさる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もしわれにおくれてそのころざしとげず、この思ひおきつる宿世たがはば、海に入りぬ』と、つねに遺言しおきて侍るなる」と聞こゆれば、君もをかしと聞き給ふ。人々、「海竜王の后になるべきいつき娘なり」、「心高き苦しや」とて笑ふ。

(若紫 ①二〇三―二〇四)

「海竜王の后になるべきいつき娘」、「心高き苦しや」はそれぞれ明石の君や明石の一族を茶化した従者たちの言葉である。前者は大げさな表現で笑いを誘う言葉ではあるが、後者はやや批判的なニュ

アンスを含んでいよう。明石の入道の教えや「海竜王」という言葉など、須磨巻以降の明石一族の物語と関連する表現が見られる。たとえば「海竜王」は、「海の中の竜王」という語で須磨巻・明石巻でそれぞれ一度ずつ見られる。先行研究では、後の巻との繋がり、すなわち長編的な構成の方向が注目されるためか、この明石の君の噂そのものを覆う全体の雰囲気、すなわち笑いが挟まれるような場面であったことはそれほど重く扱われてこなかったようである。ここでは、都から見れば辺境の明石の地で娘と高貴な男性との結婚を願うという高望みが否定的に捉えられ、笑いの対象となっていると言えよう。さらにこの後、明石の君を話題に従者たちの軽口が続いていく。

かく言ふは播磨守の子の、藏人より今年かうぶり得たるなりけり。『いとすきたる者なれば、かの入道の遺言やぶりつべき心はあらんかし』、「さてたたずみ寄るならむ」と言ひあへり。「いで、なにしに。さいふとも田舎びたらむ。幼くよりさる所に生ひ出でて、古めいたる親にのみ従ひたらむは」、「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童など、都のやむごとなき所どころよりるにふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」、「なすけなき人なりてゆかば、さて心やすくてもえおきたらじをや」など言ふもあり。

(若紫 ①二〇四)

従者たちは明石の君に言い寄るという話を波線部のように続け、そこで明石の君は軽く見られている。そして、さらにその従者たち

から二重傍線部のとおり、田舎びているだろうこと、古風な親に育てられていることが悪く言われている。母親や女房などについては好意的に話されているところもあるが、全般的には、明石の君の登場箇所の際には明石の君に対する低い評価を印象づけるものであった。ただし、後の物語の展開において、明石に留まりつづける偏屈な明石の入道に対し、明石の君・明石の姫君とともに都に上ることとなる明石の尼君は、破線部で「母こそゆゑあるべけれ」と言われているとおり、弁護されている面がある。

ひとまず、噂話における明石の君は、大切に育てられている娘という肯定的な面ばかりが描かれているわけではないだろう。一方で、竹内「二〇〇七」も簡潔ながら触れるように、この従者たちの会話を踏まえて描かれる直後の光源氏の発言、およびそれに関わる叙述は、従者たちの話とはやや異なるものであると考えられる。

君、「何心ありて、海の底まで深く思ひ入るらむ。底のみるめものもむつかしう」などのたまひて、ただならず思したり。かやうにても、なべてならずもてひがみたる事このみ給ふ御心なれば、御耳とどまらむをやと見たてまつる。

（若紫 ①二〇四―二〇五）

従者たちの悪口にも近い話にもかかわらず、「ただならず思したり」と語られるように、光源氏は明石の君に興味を持ち、風変わりなことに関心を寄せる性分から明石の君の話は耳に残るだろうと従者たちにも思われている。従者たちが笑いながらする明石の君の悪口めい

た噂話を聞いているにもかかわらず、光源氏は明石の君に興味を抱いているのである。ただし、この箇所における光源氏の興味が、好ましい女性に対して抱くものとは異なることに注意したい。すなわち、傍線部「なべてならずもてひがみたる事このみ給ふ御心」から興味を抱いたのであり、やはり普通では興味を抱かないような女性として明石の君の際には話されていたこともおさえておく必要がある。また、直後の「耳とどむ」という語は、末摘花巻に光源氏の性格として語られているものでもあり、光源氏は興味を感じる女性の話を聞くと、その女性のことを忘れずに覚えていると語られる。若紫巻直後の末摘花巻では二度言及され、若い頃の光源氏の特徴の一つとしてあると言えよう。

・いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人のつつましき事なからむ、見つけてしがなとこりずまに思しわれば、すこしゆゑづきて聞こゆるわたりは、御耳とどめ給はぬくまなきに、さてもやと思しよるばかりのけはひあるあたりにこそ、ひとくだりをほのめかし給ふめるに、なびききこえずもてはなれたるはをさをさあるまじきぞいと目なれたるや。

（末摘花 ①二六五）

・なほ、世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞きあつめ、耳とどめ給ふ癖のつき給へるを、……

（末摘花 ①二七八）

光源氏は、少しでも「ゆゑづきて聞こゆるわたり」の話は耳にとど

めていたと語られる。明石の君の噂話もひとまずはその程度ではあったのだろう。明石の君の噂話の中には「海竜王の后」という大仰な表現など注意する点はあるものの、光源氏の興味という点では他の多くの女性たちと同程度のものであったと考えられよう。さらに言えば、従者たちの話においては明石の君は笑いの対象にもなっていた。ただし、この点において注意すべきことは、光源氏は従者たちの冗談に乗るものの、明石の君の話聞いて確かに心に留めてはいるのである。全体として笑いの雰囲気包まれてはいるが、光源氏の興味という点ではそうとばかりは言えないところもあり、一面的には捉えられないと言える。

二 若紫巻の垣間見における紫の君の描写

明石の君の噂が語られた直後に光源氏は紫の君を見つけることになる。北山の大徳の寺から風景を見渡した際に、下の方に見えた僧坊が気にかかり垣間見る場面である。僧坊を見下ろした時には「小柴」「きよげなる童などあまた」「閑伽奉り、花折りなどする（人）」（若紫 ①二〇一）が見え、紫の君を垣間見る場面の伏線になっている。この伏線の場面と実際に垣間見をする場面との間に明石の君の噂話が挟み込まれるのであり、若紫巻の構成上、両者の結びつきは強いと考えられる。この連続性という観点から言えば、この二つの場面は同日の午後、しかも時間も連続していることもとりあげる

べきであろう。若紫巻の冒頭は太陽の動きにより時間の描写が丁寧に書かれており、「御供にむつまじき四五人ばかりして、まだ暁におはす」（若紫 ①一九九）、「さるべきもの作りて、すかせたてまつる。加持などまゐるほど、日高くさしあがりぬ。」（若紫 ①二〇〇）とあり、大徳の加持が終わったところで一度下の僧坊を見る。その後、「君は行ひしたまひつつ、日たくるままに、いかならんと思したるを、」とかうまぎらはさせ給ひて、思し入れぬなんよく侍る」と聞こゆれば、しりへの山に立ち出でて京の方を見給ふ」（若紫 ①二〇一―二〇二）と、後ろにある山に出て行ったところで京を見ながら明石の君の噂を話すのである。その噂話が終わった後、さらに「日もと長きにつれづれなれば夕暮れのいたうかすみた^③る」という描写から紫の君の垣間見へと続いていく。連続した一日の時間の中、しかも表現の紐帯も強い中に両者が置かれている。

日もと長きにつれづれなれば夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は帰し給ひて、惟光朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも持佛据ゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みあたる尼君、ただ人に見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてにやせたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなういまめかしきものかな、とあはれに見給ふ。

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り來たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「なに事ぞや。童べと腹立ち給へるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたところあれば、子なめりと見給ふ。

(若紫 ①二〇五―二〇六)

先の噂話において明石の一族について否定的に語られていたことの一つに、田舎びているであろうことと古風な親に育てられていることがあった。この紫の君の垣間見の場面では、まず「ただ人と見えず」「あてに」といった高貴さと上品さに言及している。さらに、光源氏に紫の君の親だと勘違いされる尼君は「こよなういめかし」と捉えられているのである。そして、そのような尼君の魅力、特に高貴さや上品さは、「すこしおぼえたところあれば」とあるように、紫の君にも感じられるものであると考えられるところである。これらは、明石の君の噂話で明石の入道が悪く言われていたことと対照的に描かれているものである。すなわち、二つの場面には対照的な表現が見られ、そして、その対照性が紫の君をより魅力的なものとする説得力を高めているのである。

一方で、両者には対照性という言葉だけでは説明できないものも

あるだろう。全体としては笑われる存在として語られた明石の一族の中で、明石の尼君が「母こそゆゑあるべけれ」と好意的に語られていたことは方向として重なってくるのである。紫の君の母親のように捉えられる尼君が、二箇所波線部のように語られており、明石の君の母と重なる面を持つのである。明石の君の噂話と紫の君の垣間見の場面は、対照的なところのみならず重なるところもあり、両者を整理する必要があるようである。紫の君の垣間見の場面の冒頭は、明石の一族の噂話において笑いの対象となっていた面については対照的な表現があらわれ、一方で好意的に描かれていたところについては重なるような表現があらわれているとひとまずは整理できよう。

紫の君に惹かれる他の理由も後で整理するが、ひとまず先の明石の君の噂話を聞いている光源氏にとっては紫の上が強く心惹かれるものになっていると言えよう。また、明石の君の噂話の記述を読んでいる読者たちにとっても、紫の君が一層魅力的なものに感じられる表現のありようになっているのである。もちろん、明石の君との対比だけではなく、扇を広げたような髪などは紫の君の特徴的な美しさとして描かれている。さらに、「いみじく生ひ先見えてつくしげなるかたちなり」とあり、将来美しくなるようなかわいらしさであることも特徴として述べられている。この「生ひ先見えて」という点については、直後の表現と繋がるものだと考えられる。

尼君、「いで、あな幼や。いふかひなうものし給ふかな。お

のがかく今日明日におほゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞとつねに聞こゆるを、心憂く」とて、「こちや」と言へばついぬたり。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪さしいみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。さるは、かぎりなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。(若紫 ①二〇七)

引用箇所冒頭では、紫の君は行為の幼さを叱られている。尼君にとっては紫の君の幼さが欠点の一つとなっているような言葉である。それに続いての波線部では、容姿の幼さが「つらつきいとらうたげにて」「眉のわたりうちけぶり」「いはけなくかいやりたる額つき、髪さしいみじうつくし」と、それぞれ光源氏の目を通して魅力のあるものとして描写される。今日の前にいる少女に対して光源氏はいかにかわいらしさを感じている一方で、「ねびゆかむさまゆかしき人かな」と少女の将来の姿「生い先」を見るのであるが、それは藤壺という最愛の女性に似ているからであった。目の前の少女の描写、生い先、藤壺との近似など、視覚的な描写が重層的に描かれることで、名も知らぬ少女を垣間見ている場面にもかかわらず、「涙ぞ落つる」という、気持ちの昂ぶりが高いところに達することとなる。

この箇所の記述を読むと、先の明石の君の噂話に対して光源氏の「御耳とどまらむ」とあったことが改めて注目される。噂話を聞いた

た光源氏は、明石の君に対する興味をたしかに抱いていたのであり、それは耳から離れないものであると描写されていたのであった。一方でこの紫の君を垣間見る場面では、目を離せないでいる。光源氏の女性への興味について、感覚器官としての耳、目、が連続して表現として用いられている。明石の君の場合には先に整理したように特別な興味というものではなかったものであり、この点においてもやはり明石の君の噂話が直前にあることで、紫の君の垣間見る場面における光源氏の心の昂ぶりが一層劇的なものを感じられるようになっていえる。紫の君の垣間見る場面は、明石の一族の噂話との表現の重なりと対照によって紫の君の登場を劇的なものにするのであった。

明石の君の噂話と直後の紫の君の垣間見る場面とが強く結ばれており、連続する短い場面として両者が繋がっていくのである。この点において、短編的な表現の仕組みを看取することができるのである。

三 「何心ありて」と「何心(も)なく」

若紫巻冒頭部の、明石の君の噂話の場面と紫の君の垣間見る場面について、両者の表現を考察した。連続して置かれている二つの場面には類似する表現や対照的な表現があり、紫の君を垣間見る光源氏の心の昂ぶりをより効果的なものに行っているということが確認さ

れた。両者の中に見られる表現は結びつくところも少なくなく、若紫巻の冒頭に両者が並べられていたことはけっして意味のないことではなかったのである。

ただし、このような表現の対応はもう少し視野を広げて捉えることができるのではあるまいか。明石の君の噂話に見られる表現と紫の君に関する表現について、若紫巻全体に広げて考察を進めていく。若紫巻全体において紫の君は光源氏にとって魅力的な人物として描かれているが、それは若紫巻冒頭の明石の君の噂話と垣間見の場面を踏まえて語られており、連続性があると考えられるからである。

まず尼君の死去の後に邸を訪れた光源氏が、紫の君を御簾越しに触れる場面である。垣間見の場合同様に髪の写真があり、それに対して「うつくしう思ひやらるる」と光源氏の心中が語られる箇所である。

「いまさらに、など忍び給ふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。いますこし寄り給へ」とのたまへば、乳母の、「さればこそ。かう世づかぬ御ほどにてなむ」とて押し寄せたてまつりたれば、何心もなくあたまへるに、手をさし入れてさぐり給へれば、なよかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかにさぐりつけられたるほど、いとうつくしう思ひやらるる。

(若紫 ①二四三)

紫の君については垣間見の場面に引き続きかわいらしさが強調される。また、この箇所においては紫の君について「何心もなく」とい

うように、無邪気さに言及されていることも見落としてはならないだろう。原岡「二〇〇三」が指摘するように「何心なし」は紫の上と女三の宮に対して集中的に用いられる語で、「紫の上、女三の宮」各々の人物をめぐる一つの鍵語」と捉えることができるだろう。

先の垣間見の場面でも子供らしい無邪気さを見せてはいたが、この場面では「何心もなく」という言葉で明確に表現されている。ここの「何心もなく」はまだ男女のことも分らず御簾から離れて座ることさえしないのを受けて表現されたものであり、光源氏にとって好都合ではあるものの、特にその様子に心が惹かれるような様子ではない。二条院に紫の君を連れ出す場面でも紫の君は、「君は、何心もなく寝たまへるを、抱きおどろかし給ふに」(若紫 ①二五四)とあった。『源氏物語』においては幼い人、あるいは若い人に対して使用されることが多い言葉であり、この二例については他の人物たちと同様に、まだあまり世のことなども分らず、悩みや考えもそれほど持っていないような子供の様子を表現する言葉として用いられている。これらにおいて、語り手の価値判断は色濃くは出ていないと言えよう。しかし、次の場面の「何心なし」という語は表現の面で重要性が高いようである。紫の君を二条院に連れ出した翌日の場面である。

やうやう起きあて見給ふに、鈍色のこまやかなるがうち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐ給へるがいとうつくしきに、我もうち笑まれて見給ふ。

東の対に渡り給へるに、たち出でて、庭の木立、池の方などのぞき給へば、霜枯れの前裁絵に描けるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位五位こきまぜに、ひまなう出で入りつつ、げにをかしき所かなと思す。御屏風どもなど、いとをかしき絵を見つつ、慰めておはするもはかなしや。

君は二三日内裏へも参り給はで、この人をなつけ語らひきこえ給ふ。やがて本にと思すにや、手習、絵などさまざまにかきつつ見せたてまつり給ふ。いみじうをかしげにかき集め給へり。「武蔵野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書き給へる、墨つきのいとことなるを取りて見ゐたまへり。すこし小さくて、

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを

とあり。「いで君もかい給へ」とあれば、「まだようは書かず」とて見上げ給へるが何心なくうつくしげなればうちほほ笑みて、……

(若紫 ①二五七―二五九)

最初の傍線部では、紫の君が「何心なくうち笑みなどしてゐ給へる」ことを光源氏が「うつくし」と感じ、つい笑顔になるのだと語られている。二つ目の傍線部は光源氏に寄り沿った語りの箇所であり、字をまだ上手には書けないと言いながら見上げた紫の君を「何心なくうつくしげなれば」と認識し、ほほ笑んでいる。前者には自然と笑顔になってしまうというニュアンスが含まれているが、この短い箇所では繰り返される表現からは、光源氏が紫の君の「何心なくうつ

くしげ」な様子に自然と惹かれていたことが強調されていると言えよう。特に「何心なく」という点と「うつくし」という点が注目される表現である。まず、この「何心なし」については葵の上や六条御息所などを念頭に置いたと思われる若紫巻末の光源氏の心中を語る箇所が参考になるであろう。

さかしら心あり、なにくれとむつかしきすぢになりぬれば、わが心地もすこしたがつふしも出で来やと心おかれ、人もうらみがちに、思ひのほかの事おのづから出で来るを、いとをかしきもて遊びなり。

(若紫 ①二六一)

藤壺を手に入れることはできず、一方うちとけてくれることのない葵の上や六条御息所といった女性たちとの関係はけっしてうまくいっているわけではない。「さかしら心」が出てきて「むつかしさ」を感じる、すなわち煩わしさや不快感さえも感じる光源氏にとって「何心なし」には、三田村「二〇〇〇」が述べるように「計算されない無防備なきらめき」があると言えよう。紫の君の無邪気さは光源氏には魅力的に感じられたのだと考えられるところである。⁽⁵⁾

これらの紫の君の描写を踏まえてもう一度明石の君の噂話を確認すると、この点においても明石の君あるいは明石の一族と対照的であることに気が付くだろう。従者たちとの話の中の光源氏の発言に次のようなものがあつた。

「何心ありて、海の底まで深う思ひ入るらむ。底のみるめも」
「のむつかしう」

(若紫 ①二〇四―二〇五)

前半は、高貴な男性と縁がなかったならば海に入れという明石の入道の言葉を念頭に置いた発言である。傍線部のように、光源氏は明石の一族に野心に近いものを感じているようである。そして、そのような野心と対峙し、深く思い詰めている一族の女性である明石の君と関係を持つことについては「ものむつかしう」という感想を抱いている。「何心ありて」は、噂話の他の箇所にも「心高き苦しや」ともあるように、強い自尊心や上昇志向が踏まえられている表現であり、批判的に捉えられているところである。もちろんこれらは明石の一族、特に明石の入道をまずは直接的に示す表現ではあるのだが、人々の興味は明石の君にあるのであって、引歌を使用した冗談のような表現であるが、結局話のまとまりのところでは明石の君をも含む「ものむつかしう」に収斂していく。この光源氏の発言においては、上昇志向の強い一族の娘である明石の君が冗談の材料とされて笑いの対象となっているのである。

「心高き苦しや」「何心ありて」と明石の一族の自尊心の高さは表現されていた。そのような自尊心の高さに対して光源氏の批判的な心の在り方が噂話では既に語られていたのであり、「何心なし」と強調される紫の君の無邪気さに光源氏が魅力を感じることは当然のことであつたと言えよう。さらに言えば、噂話で提示された光源氏の心のあり方があるからこそ、紫の君はより魅力的な存在として光源氏によって捉えられるのである。明石の一族の噂話は、紫の君を垣間見る場面との繋がりはもちろん、若紫巻全体の紫の君との繋が

りも見出すことができる。巻の冒頭に置かれることによって、若紫巻のその後の展開の骨子を形成するものの一つであつたと言えるだろう。明石の一族の噂話の表現は、紫の君を垣間見る場面のみならず、さらに若紫巻のその後の表現にも繋がっていくのであり、巻単位の表現にも通じていくものであつたのである。

なお、この「何心ありて」は、実は当の明石の君自身の物語の伏線ともなっている。明石の一族の噂話と須磨巻以降の明石の一族の語られ方、特に明石の君の語られ方には距離がある。噂話においては上昇志向のようなものが言及されていたが、阿部「一九五九」、今井「二〇〇四」らのように、少なからぬ先行研究が身分意識と自制心によって上昇志向が明石の君からは感じられにくいことを述べている。つまり、この箇所における「何心」が積極的に感じ取れるような記述が見られないということであり、事前の情報と実態との相違という趣向があるのである。このような長編的なあり方とも繋がっていく表現である。

四 二人の不安 ― 親に「おくる」 ―

明石の君の噂話が若紫巻においては人々に笑われる要素を持ち、若紫巻において紫の君がその噂話と重なる表現が見られたり対照的な描写をなされたりすることから、紫の君が一層魅力的な人物に映る表現の仕組みを論じた。さらに、明石の君の否定的な噂話は、明

石巻において物語世界に登場した際の明石の君の魅力も強く感じさせるものになる。⁽⁶⁾

この明石の一族の噂話は須磨巻・明石巻の伏線に相当する箇所であり、この噂話だけでは完結しない点があることにも再度注意を払っておこう。明石の入道から明石の君への言葉としての「もしわれにおくれてそのころざしとげず、この思ひおきつる宿世たがはば、海に入りね」は、後に須磨巻において明石の君の心中の描写と重なるものであった。

身のありさまを、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむとぞ思ひける。

(須磨 ②二一一―二二二)

この点について秋澤「二〇〇七」は、高貴な男性が自分を相手にしないことも分かっているながら身分相応の結婚もしないという明石の君に「この女性は結婚そのものを諦めている」ことを読み取り、阿部「一九五九」は「結婚前の若い女性の、何とはなしに感ずる漠然とした不安」から述べているだけの言葉だと述べる。しかし、いずれの解釈においても、このような方向の考えを持っている明石の君が、どのような人生を歩むのかという点において先を見通せない状況に置かれていることは確かであろう。しかも、若紫巻においては明石の君の心や考えに立ち入るような言葉がなく、噂話で提示されている情報では、明石の君の難しい状況が強く表されているように

ある。明石という鄙の地で高貴な男性と結ばれる可能性が極めて低く、一方で身分相応の結婚はしなないとすれば、手詰まりである。明石の入道亡き後に「海に入りね」という言葉に従うのであろうか。このままでは入道亡き後は家の衰退は免れず、大臣も輩出した明石の一族にとって不名誉なことになりかねないだろう。それゆえに明石の入道の口から、やや誇張も入りつつ強い言葉が出たのであろうが、たしかに、どのような男性とも縁づかないまま明石の入道がいなくなってしまうとすれば、明石の君は困難な状況に置かれるのである。

ただし、若紫巻の入道の「遺言」にやや切実さが欠ける面があるとするれば、明石の地における明石の一族の財力という面があるだろう。

「……かしらもおろし侍りにけるを、すこし奥まりたる山住みもせで、さる海づらに出でゐたる、ひがひがしきやうなれど、げに、かの国のうちに、さも人の籠りぬべき所どころはありながら、深き里は人はなれ心すこく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれる住まひになん侍る。先つころ、まかり下りて侍りしついでに、ありさま見たまへに寄りて侍りしかば、京にてこそとこえぬやうなりけれ、そこらはるかにいかめしう占めて造れるさま、さはいへど、国の司にてしおきける事なれば、残りの齢ゆたかに経べき心がまへも二なくしたりけり。……」

(若紫 ②二〇三)

少なくとも明石の一族の現状は、傍線部のように、地方にはいるものの邸は立派で経済的にも豊かであることが、良清が実際に見て確かに得た情報として提示されている。もちろん明石の君の結婚はどうなるのかという問題はあるが、当面は困窮することもなく、あくまでも明石の入道の死後のこととして、すなわち「遺言」として「海に入りね」という強い言葉はあらわれているのである。⁷⁾

噂話と若紫巻の関連を論じた三浦「一九九五」はこのような記述から、噂話と同様の女の出現が期待されるものの、実際には尼と幼い少女であることの相違、それから明石の君と紫の君の経済的な状況の対比などを論じる。明石の君と紫の君が経済的に対照的に描かれていることはその通りであると思われるが、しかし、表現に注目すると対照性という言葉だけでは整理しきれないようである。それは、明石の君と紫の君の将来という点において、見通すことができないという重なりがあるからである。

明石の君に関して捉えたような、庇護者に「おくれ」た後の不安は紫の君において一層切実なものとして表現されているようである。紫の君の垣間見の場面に移る冒頭に、関係する記述がまず見られる。以下、該当の箇所を再掲出する。

日もいと長きにつれづれなれば夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は帰し給ひて、惟光朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも持佛据ゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて花奉るめり。中の柱に

寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みぬたる尼君、ただ人と見えず。
(若紫 ①二〇五―二〇六)

この時点ではまだ紫の君も登場せず、尼君の素性も分かっていることが、光源氏に沿った語りにおいて、具合の悪そうな尼君がいるということが認識される。この記述は後の箇所と繋がってくるものである。

「梳る事をうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとかなうものしたまふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿におくれ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。ただ今おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とていみじく泣くを見給ふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こばれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。

生ひたたむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき

またゐたる大人、「げに」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ
(若紫 ①二〇七―二〇八)

目の前の少女の状況が尼君の言葉によって多少分かってくる場所である。傍線部にある「故姫君」「殿」がここで誰を指すのか、この時点では光源氏は分かっている。しかし、少女に関連する人

である「殿」も「姫君」も既に亡くなっていることは分かる。さらに波線部では、自分が亡くなったらどうやって生きていくのかと、庇護者が他にいないことが示される。そして、それは先の記述やこの箇所「いみじく泣く」という言葉と重なって、けっしてまったくの仮定の話ではなく、一定の切実感を持った言葉として発せられているのである。その切実感「すずるに悲し」というように光源氏の心を揺さぶるほどであり、また、和歌としてあらわれるのであった。

尼君が紫の君を「おくらす」可能性の切実さ、また特に「なやましげ」であるがゆえに死も予感される尼君が亡くなった後、少女が今後どうなっていくのかという不安があらわれている場面と言えよう。明石の君と同様に、やがて訪れるかもしれない危機、あるいは将来を見通すことができない現在の状況というものが語られている。紫の君の場合、それは明石の君よりも切迫感と切実さをもったものである点で相違はあるが、両者が抱える困難が二人それぞれの物語の展開において解消に向かう点にも注意したい。若紫巻における二人の登場の仕方は異なるが、それぞれの物語において当初抱える問題に言及しているのである。ここで興味深いのは、紫の君の落ち着き先は若紫巻で決まってしまうのに対し、明石の君の場合は後々の巻まで展開が見えないという点である。同じような問題が二人それぞれに生じているが、それは二つの連続する場面の繋がりを強めるとともに、一つは若紫巻の問題として、もう一つはもっと広い長編的

な問題になっていくのである。短編的なありようと長編的なありやうの双方を包含しながら場面が進んでいくのである。二人の話において表現を重ねたり対照させたりしながら、巻単位の物語を形成しつつ長編的な構想の中に巻き込んでいると言えよう。

おわりに

若紫巻の明石の君の噂の表現とその噂より後の若紫巻の表現を分析した。特に、噂話の直後の垣間見の場面に注目したが、二つの場面は重なる表現・内容とともに対照的な表現・内容も見られた。そのような表現の仕組みにより特に垣間見の場面がリアリティを獲得できたと思われる。また、明石の君の噂話の表現は、従来指摘されてきた長編的な繋がりのみならず、連続する場面を密接に繋げるとともに、若紫巻全体の構成にも関係してくるものであったようである。すなわち、短編とも言えない部分単位（場面単位）の視点、短編的な視点、長編的な視点の三者が混ざり合うような表現のありやうが看取できるものであった。そのような中で、連続する場面で見れば、明石の君の噂話の笑いの雰囲気と紫の君の垣間見における光源氏の気持ちの昂ぶりとがそれぞれ強調されてあらわれるのであった。そして、巻単位で見れば紫の君の魅力がより明確になり、長編的な視野に立てば明石の君の物語の枠組みがあらわれるのである。明石の君の噂話は、表現の多層的なありやうが比較的分かりやすい

形で見られると言えよう。

※『源氏物語』の引用本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』（小学館・一九九四）『新編日本古典文学全集21 源氏物語②』（小学館・一九九五）に依拠し、適宜『源氏物語大成』（中央公論社・一九五三〜一九五六）を参照して表記などを改めた。傍線等の記号は著者による。また、本文の最後に付した（）内に、巻名および新編日本古典文学全集の巻数とページ数を記した。

注

- (1) 明石の君の場合、若紫巻の後は須磨巻・明石巻まで一切の言及がない。この点で構想の問題に引き付けやすいのだと思われる。
- (2) たとえば、『山水』の若紫巻「播磨明石」の注に「須磨明石ノ両巻可書出詞之序也」とある。（国文学研究資料館国書データベースを利用し、宮内庁書陵部所蔵『源氏物語抄箋』を確認した <https://kokushonijac.jp/biblio/100231967/>）
- (3) 「日もいと長きに」の箇所は、大島本及び近年発見された定家監督本では「人なくて」である。本文を「人なくて」とする場合でも、「夕暮れ」という表現があるので、やや繋がりは弱まるかもしれないものの、時間表現による繋がりがこの箇所にも見られると言える。
- (4) 末摘花巻にも同様の表現がある。時間としてはこの引用箇所から少し後のことであるが、若紫巻とならびの巻にある末摘花巻に見られることは看過できないだろう。
- (5) 僧都から若紫の君の素性を聞いた時に光源氏の心中が「親王の御筋にて、かの人もかよひきこえたるにやと、いとどあはれに見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へおほしたてて見ばやと思す。」（若紫 ①二二三）と語られていた。こ

の描写からも「さかしら心」と「何心なし」の対照性が読み取れよう。

- (6) 噂話はズレが重要だと考えられる。たとえば若紫巻の次の巻である末摘花巻では、故常陸宮の娘の末摘花に対しての期待が大きい分、実際に会った後の容姿や対応の拙さから笑われる存在としての末摘花という位置が明確になる。

- (7) 距離の問題も大きな影響があると思われる。若紫巻冒頭は、場所への言及も多く、明石は、「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、人に思ひ残すことはあらじかし」（若紫 ①二〇二）と光源氏が思う北山よりもさらに遠くの「人の国」（若紫 ①二〇二）の出来事である。

【引用文献】

- 秋澤 互「二〇〇七」「良清の噂」『源氏物語の準拠と諸相』おうふう（↑初出は一九九〇年）
- 阿部 秋生「一九五九」「明石の御方」『源氏物語研究序説』東京大学出版会
- 池田 和臣「一九八〇」「若紫巻の成立」『講座源氏物語の世界』有斐閣
- 石田 穰二「一九七二」「源氏と紫の上と明石の上」『源氏物語論集』桜楓社（↑初出は一九五九年）
- 今井 源衛「二〇〇四」「明石上について」『今井源衛著作集 第2巻』笠間書院（↑初出は一九四九年）
- 甲斐 睦朗「一九九二」「若紫巻の明石入道の挿話」『日本語学』四一一、明治書院
- 河内山清彦「一九七九」「紫上と明石君の追念」『解釈』二五—八、解釈学会
- 小島 雪子「一九八二」「光源氏と明石君の交渉をめぐって——『源氏物語』執筆過程に関する一考察」『文芸研究』九八、日本文芸研究会
- 齋藤 暁子「一九七九」「紫上の嫉妬——対明石の場合——」『源氏物語の研究——光源氏の宿病——』教育出版センター（↑初出は一九七一年の二本の論文）
- 島津 久基「一九三六」「明石上——「斯くある作者」」『源氏物語新考』明治

書院

鈴木日出男「一九八二」「明石の君」『別冊国文学No.13 源氏物語必携Ⅱ』學燈社

竹内 正彦「二〇〇七」「北山の天女——「若紫」巻における明石一族の噂話

——」『源氏物語發生史論』新典社（↑初出は一九九二年）

玉上 琢弥「一九七一」「若紫」『源氏物語講座 第三卷 各巻と人物Ⅰ』有精堂

原岡 文子「二〇〇三」「紫の上の登場——少女の身体を担って——」『源氏

物語の人物と表現 その両義的展開』翰林書房（↑初出は一九九四年）

三浦 幸子「一九九五」「紫の上と明石の上——若紫巻における明石の挿話をめぐって——」『成城国文学』一一、成城国文学会

三田村雅子「二〇〇〇」「源氏物語のジェンダー——「何心なし」「うらなし」の裏側」『国文学 解釈と鑑賞』六五—一二、至文堂